

田辺天神山遺跡

西村 健 司

田辺天神山遺跡は、同志社大学の東にある同志社国際中学・高校の東にある丘陵上に位置する弥生時代の集落遺跡である。この遺跡は、一九六八（昭和四三）年に三回にわたって、文学部考古学研究室によって発掘調査が行われ、現在同志社校地内の史跡公園として保存展示されており、出土遺物も田辺校地内の考古学資料室（自然系等実験実習棟内）に展示されており、見学することができる。

大学進出前の宅地造成により、当時の地形はかなり変っているが、男山丘陵上にあるいくつもの支脈のうちのひとつである、北西から南東へのびる尾根上のほぼ東端にあたる、海拔約八〇メートル、平地との比

高差約四〇メートルの平坦地に位置し、山城の平野をよく眺めることができたと思われる。

この様な立地と、出土土器等の遺物から、この集落は弥生時代後期の高地性集落と考えられる。

高地性集落は、弥生時代中期・後期に出現する比高差の大きな丘陵や山頂に立地する集落遺跡である。これは、これまでの集落や、これ以降の農村が低地に立地することが多いのに対して、高地に立地し、特定の広い地域にわたって一斉に出現したり廃墟となったりする。また、農耕生活が主体であるにも関わらず、水田を主とした耕地への便が不便であること。生活に必要な飲

料水の確保が困難であること。高地にあるため風当たりが強く、住居の耐久力等の問題からみても、通常の集落とは考えにくく、高地にあるため眺めがよいことや、周濠状の溝や土塁を伴うものがあり、戦争時に避難場所として安全であり、小人数でも守りやすいということなどから、見張り場、信号場、軍事的・防塞的集落などに考えられている。

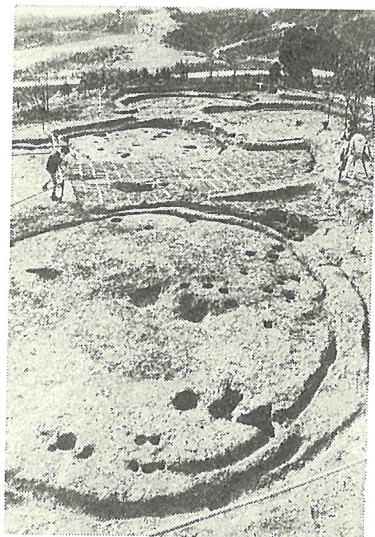
高地性集落の出現に対しては、中国の史書『魏志』東夷伝倭人の条の卑弥呼共立までの「倭国の乱」、『後漢書』の「倭国大乱」が二世紀後半にあてられ、『魏志』の卑弥呼死後の争乱が三世紀中頃に考えられ、これらの争乱が、高地性集落の時期とあう部分があることから、この争乱にあてられるものもある。

いずれにしろ高地性集落の出現は、弥生中期から後期におよぶ長期のなんらかの戦乱的状况に関係したものと考えられる。

立地関係にもよるが、集落の規模をみると（集落の見かけの大きさは存続時間の長さによっても左右されるので、併存住居数

によって見る)、①一〇二棟の住居から成り、住居以外の遺構もほとんど見られないもの。②三〇四棟止まりの住居群から成り、ピット群(倉庫)や貯蔵用土壙などの付帯遺構を伴なうことが多いもの。③六〇七棟構成で、いわゆる単位集団の規模・構造を②よりは満たすものである。④広範囲な丘陵上に二〇棟を越える住居が集住形態をとるもので、大きなものとしては、本学に資料のある、大阪府和泉市観音寺山の例の様に一〇〇棟を越えるものもある。

田辺天神山遺跡の高地性集落は、海拔約



田辺天神山遺跡

八二メートル、比高差約四〇メートルの南北約六〇メートル、東西約四五メートルの楕円形を呈する平坦地に、一部分だけ検出されたものを入れて、総数二〇棟の竪穴住居が、拡張や改築・移築などが行なわれたために、重複して検出されている。残念ながら濠状・土塁状遺構は検出されていない。尾根続きに東側の妙覚寺へ続く尾根上で、今後の調査によって検出される可能性も残っている。

住居跡の平面形は、16号住居の隅丸の五角形を除いては、円形と方形であり、これらの割合はほぼ等しい。これらは、一部分だけが検出されたものを除いて、ほとんどがほぼ中央に炉をもち、これを囲む様にする四〇七本の柱によって建てられている。

住居跡の平面プランは大きくみて、弥生後期の連続して住居が営まれた期間に、不整円形→円形→方形

へと変遷したことがうかがえ、このことから、同時に併存していたものは、五〇七棟前後であったろうと考えられる。

住居以外の遺構としては、一号・四号・七号住居跡に囲まれた、中央部の広場状の部分に、約一〇〇個の柱穴が検出されたが、多くは直径二〇〜三〇センチで、深さ三〇センチ未満のもので、貯蔵穴ではないかと考えられる二例を除いては、全体として一定の方向に並ぶものはみられず、規則的に配置された倉庫群ではない。

出土遺物は、壺・長頸壺・甕・高杯・甌・器台・手焙形土器・鉢・蓋・杯・把手・小型土器などの土器類、砥石・石斧・石鏃・叩石・石庖丁などの石器類、鉄刀子・鉄鏃・鉄鏃状鉄器・斧状鉄器・クワ、スキ先状鉄器など六本の鉄器と、九州以外では唯一の出土例である半球形青銅器が出土している。

出土の土器は、大半が弥生後期Ⅴ様式のものであることから、この集落形成の活発な時期は、弥生後期に求められる。

(京都府埋文センター調査補助員・一九八三
(昭和五十八年)大学文学部文化学科卒業)